さやま市民大学同窓会
2021年4月15日号
News No.5

なかなか収束の見えない新型コロナウィルス。まん延防止等重点措置が適用されても、イマイチ緊迫感に欠ける巷の雰囲気……。狭山市もついに感染者が550人を超えてしまいました。さやま市民大学でも、全ての講座が開始時期を10月以降に延期されました。今後の状況によってはオンライン講座以外は全て断念という状況も起こり得ます。そんな中ではありますが、同窓会も新年度の活動を始めました。3月25日の三役会議を皮切りに、4月12日の20周年記念事業委員会、14日の役員会、16日の三役会議、19日の20周年記念誌編集委員会と怒涛の会議の波が三役を襲っています。なかなか表には見えませんが、同窓会も春と共に息を吹き返し、元気に動き始めました。

❖ 今年の総会も書面表決に ❖

3月25日の三役会議では令和３年度の会員総会や役員人事案等について話し合われました。昨今の状況から、今年も会場に集まることは無理と判断し、郵送での書面表決にならざるを得ないとの結論に達しました。詳しいことは今後詰めて順次お知らせしていきます。

❖ 20周年記念事業　式典のみ、交流会は断念 ❖

4月12日の20周年記念事業委員会でも、熱心な話し合いが行われました。10月実施案も検討されましたが、ワクチン接種がその頃やっと完了するかどうかとの見通しから、結局元の2022年2月下旬～3月上旬予定に戻りました。ワクチンは感染を防ぐものではなく、発症や重症化を防ぐものだと考えられています。ワクチン接種が進んでも、依然大人数での飲食を伴う交流会は難しいだろうとの判断から、式典的なもののみ行う方向にまとまりました。具体的な内容はこれから検討していきますが、同窓会が20年続いてきたことを称え、振り返る場にしたいと思っています。コロナに振り回され続ける同窓会ではありますが、それでも負けずに出来る活動を続けます。

❖ 愛称募集　会員投票で決定 ❖

60点の愛称候補が集まりました。それぞれの名称に会員一人一人の同窓会に対する思いの詰まっていることが感じられました。ご協力有難うございました。14日の役員会の投票で3点程度に絞り、それを総会の表決と同時に行う会員投票で決定することになりました。「〇〇に行こう」「〇〇の集まりがあってね」と言い易く、親しみやすい愛称が決まることを願っています。

一時中止です

『戦国 SENGOKU 秘話と謎』講座

延期、延期……となっていた本講座ですが、現在のコロナ感染症の状態を鑑み一時中止としました。受講料をお支払い頂いている方には後日事務局より連絡をいたします。コロナの落ち着いた頃再度企画致しますので、それまで暫しお待ちください。

● 常設コラム希望します ●

巣ごもりが続く中、散歩に出かけて、大自然の豊かさにあらためて気付かされた。大自然の中での人間のありようや、大自然との付き合い方を考えさせられた。人との接触を絶たれ、孤独なウォーキングをしている人達も、大自然の息吹を受けて、新しい発見、魂のときめきを蓄積しているはずである。これらを吸収し、体験談を通して、交流を深めるべきだ。ニュースの中に、常設コラムとして体験談を募集したらどうだろうか。私が散歩していた時も、大勢の散歩者がいたので、記事は集まると思われる。コラムの名称は、例えば「大自然の息吹を受けて」とかはどうだろうか。主旨に賛同できれば、もっとセンスのある人たちが沢山いるので相談して検討してみては。　（Mさん）

常設コラム案。いいですねぇ。みんなで是非作りましょうよ。ご意見、名称、掲載希望エッセイ等募集します。いい案が出ても、行動する人達がいなければ「絵に描いた餅」ですよねぇ。　（いち広報委員）

どうお過ごしでしょうか？第2弾

コロナ禍の中でも様々な心動かす出来事はありますね。

● キンの糸 ●

朝が来た。新しい一日の始まり。カーテンを開けながら地球始まって以来の新しい朝に巡り合えた事に感謝する。いささかオーバーな表現だが最近は本気でそう思っている。子供は巣立ち、夫婦二人の朝に慌ただしさはない。ゆっくり朝食の準備をする。ごはん、みそ汁、納豆の、いつもの献立をゆっくり戴く。

結婚して５０数年、同じ屋根の下でよくこんなに長い間暮らしてきたものだ。これも何かの縁だろうか。よく赤い糸で結ばれたた２人と言うが、私たちも赤い糸で結ばれていたのであろうか？ご飯を食べながらとりとめのない事をあれこれ考える。テレビを見つめたまま黙々と食べている夫に向かって呟いてみる。「私達も赤い糸で結ばれているのかしら」夫はテレビに顔を向けたまま、「金の糸だよ」と一言。

「エッ！」金の糸って赤より格が上の事？（私にはそう思えた）その糸で結ばれているの？堅牢強固の金の糸を想像して私は心の中でニタリとする。そうか、夫はそんな風に思っていたのか。しばしボンヤリしている私に向かって、夫は手にした納豆を掲げて「納豆菌の『菌』の糸だよ」とのたまう。

なんだ！またしても夫の冗談にやられた。

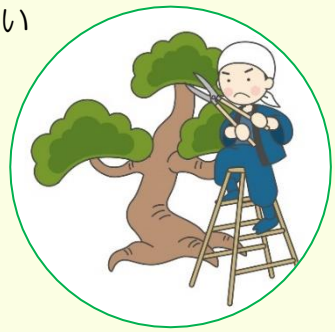
確かに私たちは毎朝ひとパックの納豆を、私が小食ゆえ半分ずつ分け合って食べている。納豆菌の糸で結ばれた夫婦とは聞いたことがないが、今の私たちにはピッタリかもしれない。これからも細く長く、粘り強い納豆菌夫婦で行こうと決めた。（Nさん）

● 庭の思い出 ●

私の実家の片隅に、小さな庭がある。息子が高校生の頃、亡き父に代わって庭の手入れをするため、年に数回車で２時間かけて向かった。私は、植木の仕事を趣味にしていた父親に、少しだけ剪定の仕方を教わっていたのだ。この庭にはチョットしたエピソードがある。

森林組合の要職を務めていた父が懇意にしていた、一風変わった腕の良い植木職人がいた。独り暮らしで風貌はみすぼらしく、煙草さえあれば食事もとらずに黙々と仕事をこなす。仕事が終わるとコップに注がれた大好きな焼酎を、チビリチビリと飲むのを楽しみにしていた。焼酎が食事代わりと言っていたその方は、母が手渡す日当が「多すぎる」と言って突き返すほどの変人振りであった。だが、腕前はピカイチ。彼でなくては、という固定客が周辺に沢山いた。父も大いに信頼し、我が家に来ると一緒に剪定作業の手伝いなどをしていたが、あるとき些細なことで仲違いをしてしまった。

そんな折、100年に一度と言う大雨が発生。山津波が集落を襲った。幸いにして私の生まれ育った家は大きな被害は免れたものの、蔵の一棟が崩壊し片付け等に人出を要した。そんな時、麓の集落に住む変人の植木職人が急斜面を登って助けに来てくれた。そして片付けが終わった後、「ついでに」と言って一週間かけて造ってくれたのがこの庭である。ところがその職人さん、庭を造った二か月後、まるで父親に別れを告げに来たかのように、自宅でひっそり亡くなった。



今でも季節毎に、爽やかな彩どりを見せてくれている、この庭の思い出である。（Tさん）